



特集 エキスパートに聞く「糖尿病診療の質を高めるアイデアと工夫」

DAWN study

岩本安彦

朝日生命成人病研究所・附属医院 所長・院長

糖尿病におけるインスリン治療の有用性は十分に認識されているが、実際の臨床ではインスリン治療の導入にはさまざまな壁があるため遅れがちとなり、十分なコントロールも得られていない。DAWN studyとは、Diabetes Attitudes, Wishes and Needs (DAWN) studyの略語であり、世界13カ国の糖尿病患者、医師（一般医、専門医）、看護師に対して調査が行われ、糖尿病患者の過去、現在の心身の状態や社会的状況などが報告された。DAWN studyを受けて、日本ではDAWN JAPAN studyが行われ、2型インスリン治療患者における興味ある調査結果が報告された。また、DAWN studyの成果を踏まえて、DAWN2TM studyが進められている。

DAWN studyの結果から

糖尿病の薬物治療の歴史をたどれば、1921年のインスリン発見直後に開始されたインスリン注射療法の歴史は経口薬治療に比べて長く、作用機序の点からも優れた治療といえる。しかし、それにもかかわらずインスリン治療にはさまざまな障壁があり、結果としてインスリン治療の導入が遅れ、良好なコントロールが得られていない現実が想定された。

そこで、実施された調査がDiabetes Attitudes, Wishes and Needs (DAWN) studyで、2001年に、世界13カ国、5426人の糖尿病患者を対象として行われた¹⁾。

図1は糖尿病患者を対象に行われた質問紙を用いた調査でどのようなことが明らかになったかを示す²⁾。

図2は糖尿病患者の診断時の反応をまとめたものであ

る²⁾。1型糖尿病患者では「うつと不安」の反応が、2型糖尿病患者では「罪悪感」を感じたことが示されており、これらの結果から、石井は1型糖尿病の診断時には、病態や治療法の説明とともに患者や家族に対するサポートが重要であると述べている²⁾。

DAWN studyにみる インスリン治療に対する態度

図3にインスリン非使用2型糖尿病患者のインスリン治療に対する態度を示す。2型糖尿病患者にとって、インスリン治療が否定的なものとしてとらえられていることがわかる。「インスリンを使うと糖尿病がよくなる」との回答が26%と低かったのもインスリン治療に対する態度が否定的なものであることが示されている²⁾。

図4は医師と看護師の糖尿病に関する考え方を調査

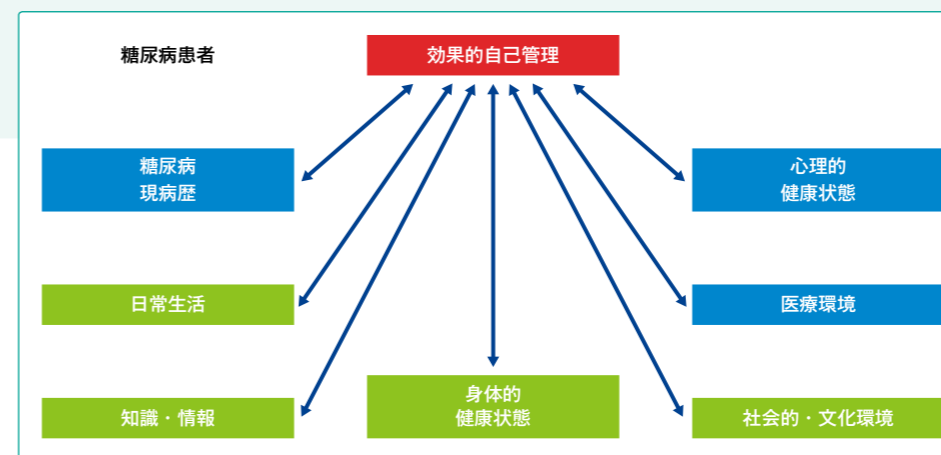


図1 DAWN調査構造(文献2より引用)

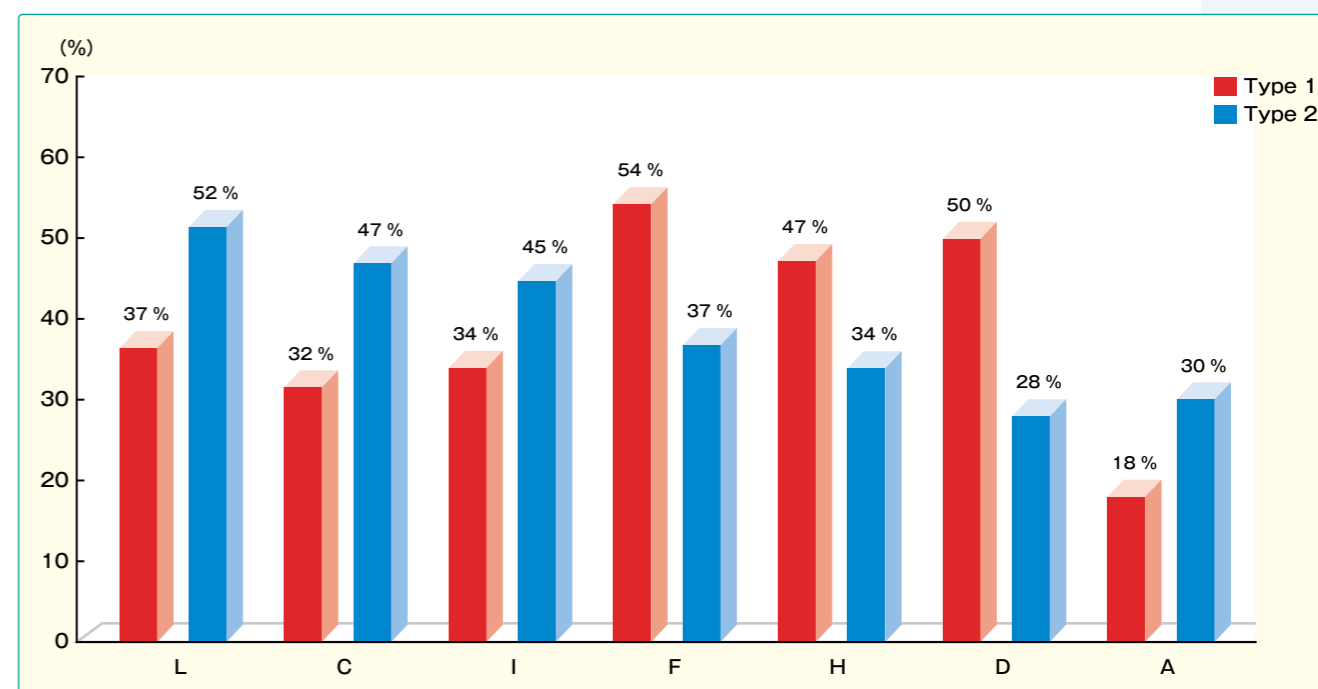


図2 糖尿病診断時の反応：1型はうつと不安、2型は罪悪感(文献2より引用)

L：心配しなかった、C：自己管理ができていなかったことで罪悪感を感じた、I：何かわかってほしかった、F：憂うつになった、H：初めは信じられなかった、D：一生どんなことが起こるか不安になった、A：もっと悪いことを考えていたのでほしかった。

したものであるが、一般医、専門医ともに“絶対必要になるまでインスリンは使わない”との回答が44%と高かったことは意外なものであった²⁾。

DAWN JAPAN studyの結果 (中間報告)

世界13カ国の共同調査研究であったDAWN studyの後、2003年には、それぞれの地域でDAWN studyを展